



W3Cが推奨するXHTML 1.1。なのに意外な弱点が

text 編集部

■(X) HTML歴史年表

年	バージョン	特徴
1993	HTML 1.0	SGMLをベースに考案され、初めて一般に公開されたマークアップ言語。見出し、段落などの文書構造のための基本要素だけでなく、他の文書や画像などの視覚要素をリンクする機能も備えた。
1995	HTML 2.0	初めて文書型定義の宣言を記述するようになったバージョン。新たに整形処理のためのいくつかのタグや、フォームの作成要素が追加された。
	HTML 3.0	W3Cから草案が公開されたものの、正式勧告されず廃案となった幻のバージョン。
1997	HTML 3.2	表組の対応のほかに、整形理用のタグや、コンテンツ表示を精密に制御するための広範囲にわたる属性が追加された。フォントや背景などのページ上のあらゆるものに色をつけられるようになったのも、このバージョンから。また、embed要素、applet要素によって、サウンドや動画、JavaアプレットなどHTTPを利用しないオブジェクトもHTMLページからリンクできるようになった。
	HTML 4.0	プレゼンテーション（表現のための整形処理）用のタグや属性を「非推奨扱い」として再定義し、HTMLのベースとなったSGMLの原則に回帰した画期的なバージョン。
1999	HTML 4.01	HTML 4.0に対してアクセシビリティを高め、より広範囲の人々に高いアクセシビリティを持たせられるようにタグのや属性の追加を行ったバージョン。
2000	XHTML 1.0	HTML 4.01をベースに、XMLの文法にしたがって考案されたHTMLのフォーマット。HTML 4.01とは内容的な互換性がある
2001	XHTML 1.1	XHTML 1.0をベースに、XHTMLファイルをXMLファイルの一種としても扱えるように改良を加えたバージョン。新たに「モジュール」という概念を取り入れている。ただし、XHTML 1.1で推奨されているメディアタイプはIEが対応しておらず、XHTML 1.0と同じメディアタイプを使わなければ、IEがHTML文書としてレンダリングしてくれない

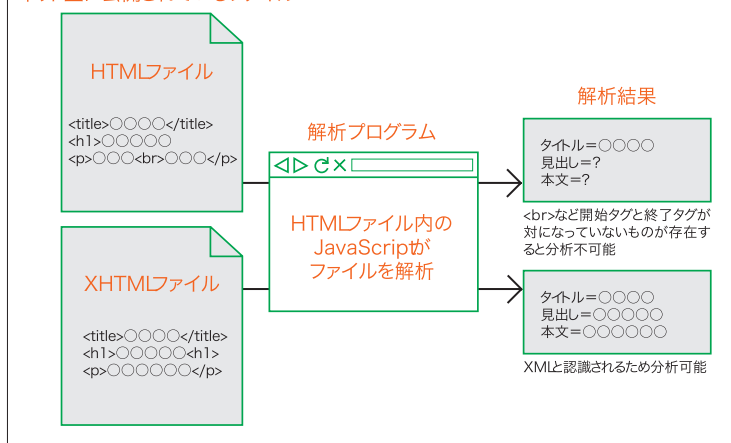
HTMLページを制作する際、一番最初に決めるべきは「作成するHTMLのバージョン」だ。ところが現在、W3Cが勧告を終えた最新のHTMLバージョンはXHTML 1.1であるにも関わらず、相変わらずHTML 4.01やXHTML 1.0のページを多く見かける。

実は、XHTML 1.1はファイルのメディアタイプ指定を「application/xhtml+xml」にしなければXML文書として認識されないが、この指定はInternet Explorer（以下、IE）は最新のバージョンですら対応していない。一応はメディアタイプ指定を「text/html」にすることでIE 7でも表示可能になるが、そうするとXHTML 1.0ではなく1.1にする利点がほとんどない。

そこで論点はHTML 4.01とXHTML 1.0のどちらを使うかという話になるのだが、現実問題としてはこの2つの間にはそれほど大きな差はない。XHTML 1.0の場合、「タグは必ず開始タグと終了タグの2個がセットになっていなくてはいけない」とか、「要素名は小文字に統一しなければならない」など、ルールが多く、HTML 4.01に比べて制作に要する工程は多くなりがちだ。ただし、その分XHTMLはXMLファイルの一種として扱えるようになるため、WebアプリケーションからXHTML内にあるテキストデータを抜き出しやすくなるという利点が生じる。

このように、HTML 4.01とXHTML 1.0は一長一短の関係にあり、どちらが優れているというような優劣関係はない。ケースバイケースで使い分ければいいのだ。

ネット上に公開されているファイル



XHTMLはXMLの文法にしたがって作られたHTML文書なので、開始タグと終了タグが必ず対になっている。このため、JavaScriptやPHPなど、Web上で利用されるプログラムにXHTML文書を読み込ませた際に、タイトルや見出し、本文などを正しく分析することができる。これに対してHTML文書では
タグに代表されるような、開始タグと終了タグが対になっていないタグもいくつか存在するため、XHTMLに較べて分析精度が落ちることが多い

XHTML 1.1 unkown weak point